

芥川龍之介文学と知識人

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 佳高 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20270

2018年度 文学研究科

博士学位請求論文（要旨）

芥川龍之介文学と知識人

日本文学専攻
金子佳高

1 問題意識と目的

芥川龍之介の活躍した時期は、知識人という用語が普及し、知識人にとって自らの存在意義を問われる時代だった。そして、芥川自身、典型的な知識人であった。このような背景を意識しつつ知識人という身分集団（教育の種類による生活様式のちがいにもとづき肯定的／否定的特権づけがなされる集団）に着目することで、芥川文学の読みの深度を深めることができるはずだ。

本論では、知識人という身分集団に着目することで、芥川文学の読みを新しくすることを目指す。芥川文学では、知識人という身分集団、あるいは知識人としての作者が、他の身分集団（大衆、外国人、軍人・理系知識人・インテリ女性など他の知識人集団）に属する人たちと出会うときに働く欲望や戦略を描いているのだ。そうした欲望や戦略を復元し、作品の読みを新たにすることが本論の目的である。ここでいう欲望とは、身分集団の異なる者との出会いによって生じる、脅かしの感情や、彼らをコントロールしたいという感情、また彼らを相対化したいという感情のことであり、戦略とは、己の身分集団に益するために採用される方策、あるいは欲望を抑え込むために採用される方途のことである。

これまで、知識人が他の身分集団に出会うときに働く欲望や戦略に目を向けて芥川文学を体系的に論じた論考はない。無論、作中に登場する知識人の分析や作者の知識人としての意識に着目されることはいくつかはあった。しかし、それらは体系的でないうえ、知識人がどのような身分集団の者と出会っているのかについては無感覚であり、知識人としての性格についても無頓着であった。大概は作者の知識人としての引け目を讀んだり、エリートとしての排除願望に目を向けたりしたものであった。本論では、知識人の欲望や戦略に目を向け、知識人が出会うことになる身分集団の特質に着目し、単に知識人の引け目や排除願望を讀む先行研究とは差異化を図った。

2 構成及び各章の要約

序章では、大正期に知識人という用語がどのように使われていたのかを確認した上で、芥川文学における知識人について概観し、本論の問題意識と目的について論じた。

第一章（芸者の恋と欲望する語り——「片恋」論——）で扱った「片恋」（『文章世界』1917年10月）では、ハイカラ文化との差異化を余儀なくされる知識人の姿が描かれている。お徳という芸者は、横浜に住み、外来の娯楽である映画を享受し、西洋人俳優に恋している。そのお徳の物語を語る「友だち」は「大学を出た」知識人であり、農民的文化のエートスと西洋文化へのコミットメントを併せ持ち、外来語を用いると同時に、伝統的な用語をも使用している。彼が自らの農民的エートスを強調するのは、ハイカラ文化との差異化を図るためである。彼がハイカラ文化を享受するお徳を冷笑するのは、自らの威信を再定位化するためである。ここに、ハイカラ文化によって不安を与えられ脅かされる知識人の像を見ることが出来る。

第二章（日清戦争と語りの戦略——「首が落ちた話」論——）で扱った「首が落ちた話」（『新潮』1918年1月）では、清の騎兵何小二の人生を様々な人物が物語っていた。語り手の語りは、〈立場をもたない語り〉、木村陸軍少佐の語りは〈中国賤視の語り〉、「神州日報」の語りは、〈中国の国家主義的語り〉、山川理学士の語りは〈人間不信の語り〉である。木村陸軍少佐と山川理学士とはいずれも知識人であり、何小二は階級の低い兵卒であることも注目される。陸軍少佐は、清に対して日本、下級兵士に対して少佐、という二つの優

越をもとに、何小二の人生を貶価する。木村の語りを相対化するのが、山川理学士の語りであり、彼の語りは人間の発言を信用しない。データに重きを置く理学士という知識人が、軍人を相対化するために活用されているのだ。そこには、軍人と己とを差異化したいという理学士の欲望も窺えよう。

第三章（軽薄な知の系譜と知識人——「葱」論——）で扱った「葱」（『新小説』1920年1月）では、逸脱した知識人・田中君と、カフェの女給・お君さんが登場する。二人の物語を紡ぐ「作者」は、知識人相手の小説を書く正統的審級の小説家である。田中君は「芸術家」であるが、性が放縦でもある点で、逸脱した知識人であると言える。モダニズム型知識人に脅かされた正統的知識人が、モダニズム型知識人を囲い込む物語が析出できると同時に、民衆や女性との出会いによって、彼らを欲望のもとに囲い込んだり、表象不可能なものとして表現したりする物語をも見出せる。

第四章（正系知識人を特権化する差異化戦略——「秋」における〈インテリ女性〉と〈新中間層〉——）で扱った「秋」（『中央公論』1920年4月）では、〈女の知の系譜〉と〈新中間層〉に対する語り手の対抗意識が描かれていた。この小説の語り手は、旧制高等学校を経た東京帝大卒の正系知識人を特権化し、〈女の知の系譜〉と〈新中間層〉を貶価している。インテリ女性に対する警戒から、男性を同性間関係の親密さによって特徴づけ、その希薄な女性との間に断層をつくった。男女の差異化を図るのは、女性知識人の職業への道を閉ざすためである。また、新中間層と正系知識人との差異化も図られている。新中間層を合理性によって特徴づけ、正系知識人を人情によって色づけているのである。これら二つの差異化戦略により、〈女の知の系譜〉と〈新中間層〉を貶価し、正系知識人を特権化しているのが、「秋」という小説の構造である。

第五章（中国を語ること——「南京の基督」論——）で扱った「南京の基督」（『中央公論』1920年7月）では、第一に、中国の近代化を描いていた。中国の近代化を描くことは、中国を古い国として記述するオリエンタリズムの思考からは免れているが、日本と同じように中国に近代化を期待する点で、知識人の側に立つ語り手の欲望を表しているとも言える。第二に、この作には母胎回帰の物語が見られる。中国にエキゾチックな美を期待するオリエンタリズムの思考も併せ持っているのであり、中国に対する知識人の二重の欲望が窺えるだろう。第三に、語り方に知識の排除と知識の肯定の両方が見られる。知識の肯定と否定との矛盾したスタンスを持つ語り手からは、中国の娼婦を語る知識人の、娼婦と己とを差異化したいという欲望と、その欲望を抑え込みたいという戦略が読み取れるだろう。

第六章（愛と権力——「妙な話」論——）で扱った「妙な話」（『現代』1921年1月）は、「私」の旧友・村上が、「私」と村上の妹・千枝子との不倫を、隠微に詰問した推理ショーである。村上が擁護する千枝子の夫が第一次世界大戦後、日本の外交的・軍事的に貢献したエリートであったのとは裏腹に、「私」は朝鮮で働くことを余儀なくされた、エリートの中での脱落者である。村上の特権的な立場から「私」の不倫を詰ることになるが、その特権性は、超感覚のイメージが付与されることで、作品外コンテキストから相対化する。エリートの中のエリートと、エリートの中の落伍者とが区分けされているわけだが、作品の構造は前者を相対化するものである。この作では、エリートの中の落伍者に対して温かいまなざしが、エリートの中のエリートに批判的な視座が注がれている。そして、エリートの中のエリートの権威主義的欲望が描かれている。エリートの中のエリートと言っても、東京帝大を経た正系の学歴エリートではなく、千枝子の夫は海軍の武官である。それに対し、「私」は軍人ではないと考えるのが普通の読みである。芥川が、この作でエリートの中のエリートを相対化しえたのは、彼が軍人だからであるだろう。芥川にとって軍隊エリートは相対化するものだったのだ。正系学歴エリートとしての作者の欲望に着目することで、「妙な話」の相貌はより鮮明になるのだ。この作には、軍人に対する貶価が見られるのである。

第七章（保吉物と軍隊——「保吉の手帳から」「あばばば」「寒さ」——）では保吉物を取り上げた。「保吉の手帳から」（『改造』1923年5月）の〈わん〉では、就きたくない教職に就いているという現状が、乞食に同一化するのに用いられ、権力とのへだたりをつくっている。「あばばば」（『中央公論』1923年12月）でも、権力とのへだたりをつくる装置が見られる。エリートを平凡な人間として叙述することで、平凡な女の平凡な幸福を描くことを可能にし、海軍の欲望に抗している。高等教育は、貧しい階層（プチブル）の子弟を基盤としていた。そのため知識人は、下層の人たちに同一化しやすいのである。これら二作は、知識人

としての欲望を抑え込む戦略が描かれていると言えるだろう。「寒さ」（『改造』1924年4月）では、文学者の造形に、軍隊批判が見られる。理学士と文学者を対比し、前者を公式主義的な人物、後者を、同情し、事物を〈個〉として見る人物として描いている。この作には文学部卒特有の矜持が見られる。文学部は、経済的な期待収益が少なくなる分、文化資本への思い入れが強くなる。そのため、文学的なものの見方に矜持を抱きやすい。人に対して同情し、具体性を持って事物を見るという、文学的なものの見方を誇りと思いやしいのである。

第八章（北京の駐在員の物語——「馬の脚」における日本人社会システム——）で扱った「馬の脚」（『新潮』1925年1月、2月）では、北京在住の知識人が、知識人としてのステータスシンボルに執着する様子が描かれている。衛生意識を身につけ、蓄音機をかけ活動写真を見に行くことで芸術を解し、洋服を着て日本間を西洋間に変えるという生活様式は、中間層にとっての理想的なものとして語られたものであった。ジャーナリズムで語られた中間層の理想的な生活様式を取り入れる半三郎夫妻の生活は、異国で共同性を創り上げるのに役立っている。その共同性が差別を招来するありようを描いているのがこの作であり、それを描くことで、知識人という身分集団の共属意識を風刺しているのである。

第九章（旅——「湖南の扇」論——）で扱った「湖南の扇」（『中央公論』1926年1月）では、知識人の保守性が描かれている。中国の不衛生や中国人の攻撃性、中国の排日的趨勢や革命運動に脅かされる「僕」は、異国の他者性に脅かされているのだと言える。「僕」が脅かしを受けるのは、知識人が保守的だからである。知識人という身分集団は、現体制の中で特権を享受している。だから、現体制と異なる文化や、現体制に抗う運動には共感を示すことが難しくなる。

終章では、芥川龍之介文学は、知識人が他の身分集団、あるいは他の知識人集団と出会うときに働く欲望や戦略が描かれていることを確認した。知識人と言っても多種多様であり、その知識人としての性格に目を向けることの重要性、知識人が出会うことになる身分集団の性質の分析の不可欠であることを確認できたと思う。